日・チェコ交流 100 周年
ミュシャと日本、日本とオルリク

# めぐるジャポニスム

## 響き合う東西、イメージの交歓

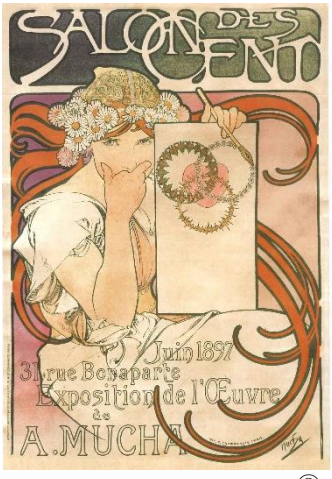
①

この展覧会は、チェコ出身の 2 人の画家、アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)とエミール・オルリク(1870-1932)を軸に、ジャポニスム(日本趣味)の時代に出発した彼らの作品と、その影響を受けた日本の作家たち、さらにはオルリクに木版画を学んだドイツ語圏の画家たちを取り上げ、グラフィックを舞台に展開した東西相互の影響関係に光をあてようとするものです。

ミュシャは、ジャポニスムに沸くパリで、女優サラ・ベルナールを描いた《ジスモンダ》に始まる一群のポスターで人気を博しました。その熱狂はすぐさま日本に伝わり、ミュシャの女性像は 1900 年創刊の雑誌『明星』で紹介されて、藤島武二や中澤弘光らに大きな影響を与えました。一方、オルリクはプラハを拠点にベルリンやウィーンなどヨーロッパ各地でジャポニスムの潮流に触れ日本への憧れをつのらせ、1900 年から翌年にかけて来日しました。浮世絵版画の彫りや摺りを学んだオルリクは、帰国後に自作をプラハやウィーン、ベルリンで展示、ヨーロッパの木版に新風をもたらしました。また、オルリクが日本滞在中に制作した石版画は雑誌『方寸』に集う若き画家たちを大いに刺激しました。

こうした 1900 年前後の影響関係は、グラフィックを介したジャポニスムとその還流と捉えることができます。本展ではミュシャとオルリクに加え、背景としてのチェコのジャポニスムを紹介するほか、ウィーン分離派周辺の作家やヴォイチェフ・プライシク、タヴィーク・フランチシェク・シモン、ヴァルター・クレム、カール・ティーマン、日本の雑誌『明星』と『方寸』周辺の作品など 400 点以上を展示し、グラフィックならではの、即時的で双方向な東西の芸術交流を探ります。

②




③

④

①葛飾北斎《冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏》1831-33 年頃、島根県立美術館　新庄コレクション、後期展示　②アルノシュト・ホフバウエル《「マーネス美術家協会第 2 回展覧会」ポスター》1898 年、チェコ国立プラハ工芸美術館　③アルフォンス・ミュシャ《「サロン・デ・サン　ミュシャ作品展」ポスター》1897 年、インテック　④エミール・オルリク《築地第一ホテルの前の人力車》1901 年、パトリック・シモン・コレクション、プラハ

静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1葵タワー3F
tel. 054-273-1515（代表） fax. 054-273-1518

【プレスリリースのお問合せ】
展覧会担当：山本・小川
広報担当：大庭・岡田

開催概要

◆会期　　:2020 年 4 月 11 日(土)～5 月 24 日(日)
※会期中展示替えがあります。前期 5 月 6 日(水・祝)まで、後期 5 月 8 日(金)から

◆休館日　:毎週月曜日　※ただし 5 月 4 日は開館、5 月 7 日(木)は休館
◆開館時間 :10:00～19:00(入場は閉館の 30 分前まで)
◆観覧料　:一般　1,300(1,100)円、大高生・70 歳以上　900(700)円、中学生以下無料
※リピーター割引:2 回目以降、本展の有料観覧券半券提示で当日券 200 円引き
※(　)は、前売および 20 名以上の団体料金(団体券は来館当日に限り購入可能)
※障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則 1 名は無料

◆前売券(予定):2019 年 2 月 29 日(土)から 4 月 10 日(金)まで販売
◆主催等
**主催**:静岡市、静岡市美術館　指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、読売新聞社、美術館連絡協議会、Daiichi-TV
**協賛**:ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜
**後援**:駐日チェコ共和国大使館、チェコセンター東京、静岡市教育委員会、静岡県教育委員会
**協力**:ルフトハンザカーゴ AG、一般財団法人高久国際奨学財団
**コーディネート**:イデッフ　**特別協力**:チェコ国立プラハ工芸美術館、ダッハウ絵画館

---

展覧会の見どころ

**(1)いち早く日本にも紹介されたミュシャと、「日本のミュシャ派」**

1900 年にパリで開催された万国博覧会を機に洋行した浅井忠、黒田清輝らの画家たちはアール・ヌーヴォーのポスターや印刷物、工芸品などを日本に持ち帰りました。特にミュシャのスタイルは、藤島武二や中澤弘光などに大きな影響を与え、「日本のミュシャ派」ともいうべき作品群が生み出されました。本展では、浅井忠がパリの部屋に貼っていたのと同図のミュシャのポスターや、雑誌『明星』などを通じ、イメージの連鎖と展開を紹介します。

**(2)チェコの画家オルリクが教えてくれた、明治ニッポンの日常の美**

プラハ生まれのエミール・オルリクは、ドイツのミュンヘンで版画制作を学び、オーストリアのウィーン分離派のメンバーとしても活躍した画家です。19 世紀末ヨーロッパのジャポニスムの思潮の中で日本に憧れ、ついに 1900 年から翌年にかけて来日。日本画の筆法や浮世絵の木版技法を学ぶ一方、印刷所で当時日本では誰も試みなかった石版画を制作しました。日本の風景や人々を描いた作品は日本の若い画家たちを魅了し、芸術作品として版画を制作するという新しい考え方を後押ししました。本展では、オルリクが滞日中と帰国後に制作した版画や、オルリクに触発されて石版画を始めた織田一磨の〈東京風景〉〈大阪風景〉連作などを展示し、明治・大正時代の懐かしい風景へと誘います。

**(3)日本初公開作品を含む、華麗なるグラフィック作品 400 点以上が集結！**

20 世紀前半のチェコを代表するグラフィックデザイナーのヴォイチェフ・プライシク(1873-1944)や、ジャポニスムの影響のもと制作を始め、1926 年からの世界一周旅行では日本にも立ち寄っているチェコの代表的版画家タヴィー

ク・フランチシェク・シモン（1877-1942）、オルリクの影響によって多色木版画を制作するようになったヴァルター・クレム（1883-1957）とカール・ティーマン（1881-1966）など、これまで日本では紹介される機会の少なかった画家たちのポスターや装幀、版画作品などを多数紹介します。

---

展覧会構成　前後期の表示のない作品は通期展示です

**◆プロローグ　ジャポニスム――光琳、型紙、そして浮世絵**

葛飾北斎《冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏》1831-33 年頃、
島根県立美術館、新庄コレクション（後期展示）

**◆第 1 章　チェコのジャポニスム**

左から
ヴァレンティン・ヘルディチカ
《「日本の版画　ブルノ P.U.V.クラブ第 31 回展」ポスター》1898 年
タヴィーク・フランチシェク・シモン
《ルンベ・ガーデンの大聖堂》〈フラチャニ・アルバム〉第 2 葉、1916 年
2 点ともチェコ国立プラハ工芸美術館

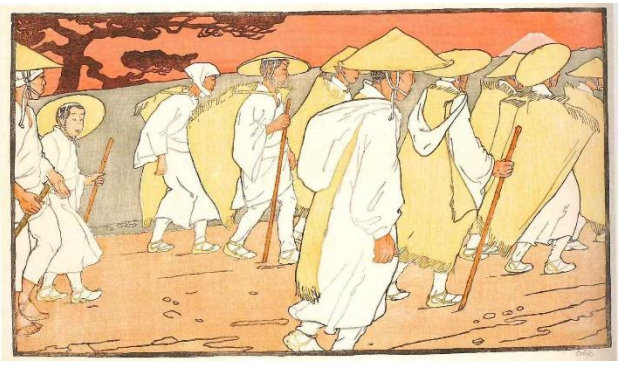
**◆第 2 章　ミュシャと日本**

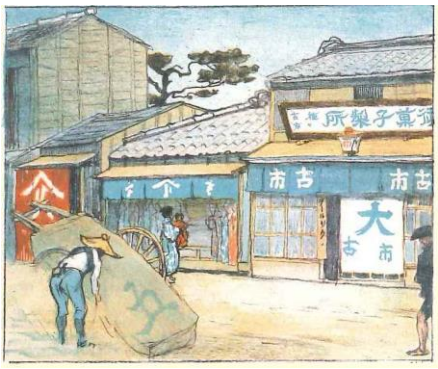
アルフォンス・ミュシャ《「ジョブ」ポスター》1898 年、三重県立美術館

☜ point!
浅井忠がパリの部屋に貼っていたポスターと同じ絵柄！

左から
藤島武二《明星》（『明星』第 13 号表紙）1901 年、個人蔵
中澤弘光《嗅（女学生）》〈美人と感覚〉、1905 年、
三重県立美術館（前期展示）

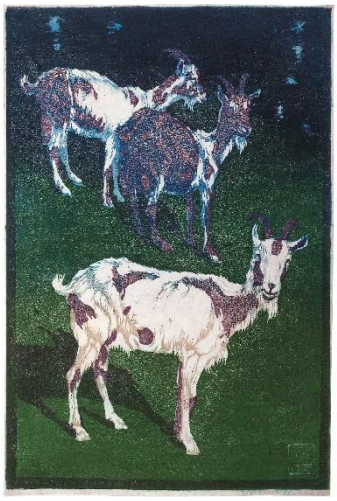
◆第 3 章　日本とオルリク





（上）エミール・オルリク《富士山への巡礼》1901 年、
パトリック・シモン・コレクション、プラハ
（右上）エミール・オルリク《東京の通り》〈日本便り〉、
1900-01 年、宮城県美術館
（右）織田一磨《上野広小路》〈東京風景〉、1916 年、
千葉市美術館（後期展示）

◆第 4 章　オルリク――日本の思い出／後継者たち



（左）ヴァルター・クレム《ヤギ》1907 年
（中）カール・ティーマン《牧草地》1907 年
（右）カール・ティーマン《白百合》1917/1926 年
3 点ともダッハウ市、ティーマンコレクション／ダッハウ絵画館

☜ point!
ドイツのダッハウ絵画館
から初来日！

関連イベント
講演会、ギャラリートーク、映画上映会など開催。